文化財をたずねて

No.23

発行　赤穂市教育委員会
編集　生涯学習課文化財係
（赤穂市加里屋 81　TEL 43-6962）

城下町跡をあるく

千種川流域は、比較的急峻な山地と狭隘な平野が特徴で、本来、上流からの土砂流出は少ないことから、陸地化はあまり進まなかった。しかし平安時代になると、千種川上流でいわゆる「千種の鉄」の生産が始まり、河川への多量の土砂排出を伴う「鉄穴流し」法が盛んに行われた。その結果、千種川河口は洪水の起きるごとに大量の土砂が流れ込んで急激に陸地化した。突如生み出された、この新たな土地を求め、山麓から人々が移住してきたのが、城下町の始まりと言われている。室町時代になると、当時は海岸沿いであった「寺町筋」から「壱町目筋」周辺に加里屋古城が築かれたが、陸地化はさらに進む。江戸開府後の慶長７（1603）年、赤穂を支配していた池田氏は、さらに南に進出して海城としての掻上城を築いた。

赤穂城下町の町割は、元和７（1621）年９月 28 日に起きた「加里屋大火」で、ほぼ全焼した加里屋を復興する際、池田家の代官であった垂水半左衛門が初めて作ったと言われている。その後、常陸国笠間から入封した浅野長直は、池田時代の城下町をベースとし、1650 年前後に城下町の大規模拡張整備を行った。現在の赤穂市街地は、区画整理事業で改変された一部を除くと、池田・浅野時代の町割と大きく変わることはない。

江戸城における刃傷事件によって浅野家が改易となると、永井家の支配を経て備中国西江原より森家が入封する。それまで 53,500 石あった石高は 20,000 石にまで減少したため、侍屋敷地に「明地」が目立つようになったほか、侍屋敷地の一画がまるごと田地となるなどした。家臣団の減少は城下町経済に大打撃を与えたが、江戸時代より大規模開発の始まった東浜塩田、西浜塩田で生産された「赤穂の塩」のブランド化は、大阪における専売制を敷くほどにまで業績を伸ばし、経済的に窮乏する森家を商人たちが下支えする形となった。

赤穂城と赤穂城下町の主な歴史

年　　代	事　　項
文安２～３年（1445 ～ 1446）	中庄から兵庫津への入船記録（兵庫北関入舩納帳）
享徳年中　（1452 ～ 1455）	赤松満祐の一族、岡豊前守光景が加里屋古城を築く（播州赤穂郡志） ※文正元～文明 15（1466 ～ 1483）年の異説あり
この頃	塩屋高山山麓から加里屋上町に集落が移住
享禄年中　（1528 ～ 1531）	民家今の壱町目、出河原、弐町目辺りに出る（加里屋古城が南に移動？）
天正 10 年　（1582）	羽柴秀吉が姫路から備中へ進撃するため、加里屋に新土手（姫路街道）を築かせる
慶長５～７年（1600 ～ 1603）	池田輝政が播磨 52 万石を与えられ、赤穂に掻上城が築かれる
元和２年　（1616）	赤穂上水道の敷設完了
元和７年　（1621）	加里屋大火、２棟を残して加里屋全焼 垂水半左衛門、はじめて町割をつくる
正保２年　（1645）	池田輝興が改易、常陸国笠間より浅野長直が入封
慶安元年　（1648）	浅野長直、赤穂城築城に着手
正保３～承応２年（1646 ～ 1653）	田町や新町の造成
寛文元年　（1661）	赤穂城完成。
元禄 14 年　（1701）	江戸城にて刃傷事件、赤穂浅野藩断絶
元禄 15 年　（1702）	大石内蔵助良雄らによる討入り決行
宝永３年　（1706）	備中国西江原から森長直が入封
安永６年　（1777）	博文館完成
安永７年　（1778）	本丸内屋敷出火、累代記録多く焼失
明治２年　（1869）	版籍奉還

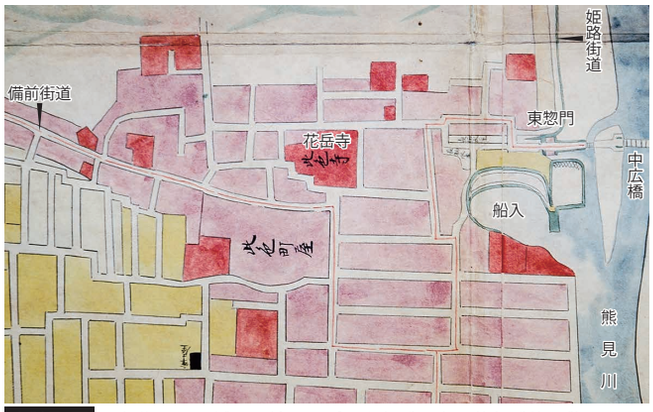
コラム　赤穂城下町跡の構造

江戸時代の城下町は、たんなる「町」ではなく、政治の中心である城郭の防備を重視して設計された。点在する寺院は、戦時に武者溜まりの機能を果たし、鍵型に折れ曲がる道は、見通しを悪くするとともに、敵の軍勢の勢いを軽減させることができた。

現在の赤穂城下町跡は、池田時代に設計された町割をベースとし、浅野長直によって拡張整備されたものである。その構造は、北へつながる姫路街道と、西へつながる備前街道の交点に各寺院を配置して守りの要とし、そこから南の城郭にいたる部分に町屋敷を設定した。街路の各所には、木戸門が置かれて門番が常時警備した。

赤穂城は、東を熊見川、南を瀬戸内海に囲まれた自然の要害となっており、街道および城内防備のため、侍屋敷は城の西北に配置された。一方で、熊見川に接して城内と城下町にそれぞれ船入を設置することで、流通の拠点とした。

このように赤穂城下町は、熊見川河口の自然地形と街道ルートを綿密に分析し、軍事的、経済的な効果を最大限発揮できるよう、計画的に設計された町並みであると言える。そしてこの町並みは、現在も大きく変わることなく残されている。



寺院配置　元禄期ころの城下町絵図。ピンク色が町家、黄色が侍屋敷、赤色が寺院である。北に姫路街道、西に備前街道が接続し、東は熊見川から中村へと続く。

鍵型街路　街路を歩くと、側溝が不自然に折れ曲がる箇所がみられる。これが鍵型街路の名残である。当時は街路に面して町家の壁が迫っていたため見通しが効かなくなった。道幅が変化することで、敵の軍勢の勢いを軽減させることもできた。

大嶋山萬福寺

照満山大蓮寺

台雲山花岳寺

①大嶋山萬福寺

真宗大谷派の寺院。もと英賀（姫路市）に建立されていたが、那波大島（相生市）を経て天正年間（1573 ～ 1592）に加里屋に移った。

②照満山大蓮寺

浄土宗の寺院で、もとは北方の山麓にあったと伝えられ、城下町の形成とともに加里屋に移された。天文元（1532）年には、開山した察道が没していることから、加里屋最古の寺院と言える。境内には、帰依を受けた浅野長友夫人である戒珠院の墓があるほか、大石内蔵助良雄の寄進と伝えられる稲荷神社、石灯籠がある。また大川安碩、赤松蘭室、神吉東郭といった幕末期の文人の墓が残されている。山門は市指定有形文化財。

③台雲山花岳寺

正保２（1645）年に、浅野長直が父華嶽院と母台雲院の菩提寺として建立し、その法名から台雲院華嶽寺と称した。曹洞宗永平寺の末寺である。以後歴代赤穂藩主となる永井家、森家の菩提寺でもある。

境内には浅野・森家墓碑、赤穂義士47人の墓碑、義士宝物館、義士木造堂、大高源五の句碑等があり、赤穂藩や義士関連資料が数多く保存されている。山門は、もと城下町の西惣門であったものを明治６（1873）年に花岳寺21代仙珪和尚が購入移築したものである（市指定有形文化財）。また、赤穂城の縄張を行った近藤正純の墓が、妙慶寺から移されている。池田時代、このあたりは鉄砲屋敷であり、周辺の発掘調査で鍛冶関連遺物が出土した。

④法耀山高光寺

かつて大津村にあった日蓮宗の寺院である妙典寺が、寛永 17（1640）年に備前街道に対する構えとして、現在地に移された。明暦 3（1657）年に浅野長直から本尊の寄進を受け、寛文 2（1662）には長直夫人の菩提寺となり、延宝 2（1674）にその法名高光院を用いて寺号を改めた。

寺には原惣右衛門が奉納した直筆の法華経 8 巻、大石内蔵助良雄画の大黒天画像、浅野家寄進の三十番神画像、鬼子母神十羅刹女画像のほか、義士の位牌などが残されている。

法輝山高光寺

⑤長遠山（王法山？）福泉寺

寛文 5（1665）年に開創された法華宗の寺院で、境内には茅野和助の子猪之助の墓があるほか、大石頼母助良重の書簡が伝えられている。

幕末の文久事件により藩政から退けられた村上真輔の次男河原駱之助が藩領外へ立ち退く途中、襲撃の企てがあることを知り福泉寺で自害しており、境内にはその墓がある。

長遠山福泉寺

⑥江西山随鷗寺

元和 2（1616）年に開創された臨済宗の寺院。開山の雲甫は不生禅を確立した盤珪の師である。寺の裏は熊見川に面し、浅野時代には遠林寺とともに水軍の屯所としての役割を担っていた。境内の墓地には義士の肉親や近藤源八の墓がある。

江西山随鷗寺

⑦朝日山永應寺

延徳 2（1490）年に開創された浄土真宗本願寺派の寺院。中村にあり「播磨六坊」のひとつ。寺には大石内蔵助良雄から寄進された喚鐘とその際の書状が残されている。墓地には、延享 4（1747）年に『播州赤穂郡志』を著した藤江忠廉の墓がある。

朝日山永應寺

⑧春日山常清寺

慶安年間（1648 ～ 1655）に開創された真言宗の寺院で、もとは東性寺といったが、浅野長直三回忌の延宝 3（1675）に長直の法号をとって寺号とした。城下町の東北隅に位置し、東惣門の押さえとしての役割を担っていたという。寺には、浅野家からの寺領寄進状が残されている。

春日山常清寺

⑨妙慶寺

浅野赤穂城を設計した近藤正純が建立したもので、赤穂城築城の余材をもって築かれたと伝わる。近藤正純の墓は、後に花岳寺に移された。すぐ南に隣接して眞誓山報恩寺もあった。

⑩玉龍院

かつては玉龍庵、因首座（いんしゅそ）と言った。北側には慶長 2（1597）年に移築再建されたという大高山長安寺（大楽院）があったが、昭和 32（1957）年に普門寺と相合して尾崎に移された。

玉龍院

⑪等力山浄念寺

真宗本願寺派の寺院で、明応 4（1495）年に釈浄が開基した。かつて萬福寺前にあったが、元禄 15（1702）年に現在の場所に移ったという。

⑫冥應山遠林寺跡

池田時代の臨済宗玄興寺を浅野時代に真言宗遠林寺と改め、浅野家の祈

赤穂城下町　散策マップ

赤穂市立有年中学校
天王堂地蔵
㉑山崎山八十八箇所石仏
戸嶋桝
赤穂警察署
↑坂越・有年方面
N
龍安寺
龍安寺地蔵
ＪＲ播州赤穂駅
赤穂観光協会
タクシー乗り場
←山陽道赤穂ＩＣ．方面
プラット赤穂（有料駐車場）
交番
上水道モニュメント
旧姫路街道
国道052号
赤穂郵便局
赤穂小学校
赤穂幼稚園
赤穂市立図書館
赤穂市文化会館（ハーモニーホール）
⑳大嶋黄谷窯跡
赤穂市民会館中央公民館
加里屋川
赤穂地区体育館
中広川
赤穂保育所
赤穂市教育委員会
上水道モニュメント
無料駐車場
赤穂市役所
㉔赤穂市役所下遺跡
百々呂屋裏大枡
⑧常清寺
⑬普門寺跡
⑨妙慶寺
赤穂健康福祉事務所
赤穂保健所
赤穂中央病院
赤穂中央病院
⑤福泉寺
息継ぎ広場
息継ぎ井戸
㉑赤穂町役場跡
東惣門跡石標
無料駐車場
㉓赤穂鉄道播州赤穂駅跡
赤穂情報物産館
③花岳寺
花岳寺前店街
⑯花岳寺山門
赤穂緞通
加里屋工房
お城通り
⑮船入跡
船入広場
無料駐車場
⑦永應寺
新町地蔵堂
旧備前街道
④高光寺
西惣門跡石標
⑩玉龍院
花岳寺門前広場
⑥随鷗寺
⑫遠林寺跡
中広（旧中村）
菅谷半之丞
早水藤左衛門
近松勘六
②大蓮寺
⑯大蓮寺山門
加里屋（旧町家）
⑪浄念寺
⑲赤穂神社跡
W.C.

江戸時代の旧上水道ルート

説明板・案内図（人名は赤穂義士宅跡）

現在に残る武者溜り

道の幅を変化させることで、敵の軍勢の動きを止める役割がありました。このほか、十字路も鍵型の形状とし、見通しをきかなくさせていました。また武者溜りが今に見えることで、昔の街路が残されていることがわかります。

0　400 m

1：5000

等力山浄念寺

城下町船入跡（船入広場）

願所、赤穂藩水軍の屯所とされた。赤穂浅野家断絶後は大石内蔵助が開城の残務処理を行ったこともある。明治 14（1881）年に廃寺となり、本堂は御崎の廣度寺に移築された。

⑬明王山普門寺跡

かつて雄鷹台山にあったが、慶長 2（1597）年にこの地に建立されたという。加里屋の区画整理のため、昭和 32（1957）年に尾崎に移された。現在、国重要有形文化財の千手観音坐像が納められている。

⑭天神宮跡（梅通寺跡）

正保 3 年（1647）、浅野長直が笠間城内にあった鎮守を塩屋門西に移し「天神宮」として建立したものという。元文元～明和 6（1736 ～ 1769）年頃には、森忠洪によって、空き地となっていた大蓮寺南に移された。明治 12（1879）年の寺社明細帳によれば、信徒は 7,108 人を数えたが、明治 42（1909）年、この地に移転してきた赤穂神社に合祀された。

⑮城下町船入跡

江戸時代になると、熊見川に接して赤穂藩の船入が築かれた。元禄期の絵図には船入北側に雁木や船奉行屋敷、水主屋敷、船頭屋敷が描かれている。森時代になると役目を終えて水田となり、現在はその一部が加里屋駐車場になるとともに、隣接して船入広場が整備されている。平成 14（2002）年の発掘調査で、18 世紀代の護岸石垣が確認された。

コラム　赤穂城下町跡の発掘調査

赤穂城下町跡は、JR 播州赤穂駅から赤穂城跡へといたる通称「お城通り」の街路整備事業に伴う調査で初めて確認された。遺構が非常に良好に残されていることが判明し、平成 10（1995）年度から本格的に発掘調査が行われている。

街路整備事業に伴う発掘調査は平成 16（2004）年度まで継続的に実施され、赤穂城下町跡の町家の実態をかなり明らかにすることができた。例えば、池田時代の地面は現在の地面よりも約 1m 下にあり、掘立柱建物で生活していたこと、浅野時代になると面的に造成されて城下町としての体裁が整えられたこと、森時代にも造成されて町家が改築されるが、上水道の位置や建物区画は大きな変更がされていないことなどが判明している。なによりも、町家跡の残りが非常に良好であることが判明した点は、素晴らしい成果であった。

一方で侍屋敷跡は、造成や建替えなどが何度も行われることが少ないことから、後世の建物によって、古い建物跡が破壊されていることが多いこともわかってきた。発掘調査を行うと建物礎石が見つかることは少ないが、地面を掘削してつくられた水路やゴミ穴などが確認される。こうした遺構からは、陶磁器類だけでなく木簡など貴重な出土遺物が得られており、当時の城下町を明らかにする重要な成果となっている。

城下町の断面　発掘調査でみつかった城下町跡の土層断面。スケール左側周辺を見ると、造成土層をいくつか挟んで褐色や灰色の生活面（当時の地面）が観察できる。発掘調査ではこれらの生活面を 1 つずつ上から調査する。写真中央にある円形の瓦は、上水道遺構。

町家跡の発掘　発掘調査された町家跡を上から撮影したもの。道路側（写真上）からのびる屋敷境界となる石列や礎石が多数見つかり、間取り復元も可能である。浅野時代。

コラム　赤穂上水道

城下町周辺は標高が低いため、井戸水は塩分が多く飲用に適さなかったことから、町家を含む各戸に給水する上水道施設が、はやくも元和２（1616）年に整備された。これは全国的に見ても初期の事例である。

上水道は、城下町から約 7km 北方で千種川の余水より取水された。山際に掘削された水路を開渠で通り、城下町北側に築かれた２間（約４m）四方の石組み枡で一度沈殿濾過された。その後は暗渠で城下町街路下から各戸にくまなく給水され、赤穂城の堀下をサイフォン式で潜り抜けて城内を潤したのち、海へ排水された。

この優れた上水道施設は、昭和 19（1944）年の近代的水道敷設まで使用され、以後も打ち水等に使われた。

導水・配水路としては石組み溝や土管、陶管が、各戸への給水には竹管や瓦管、土管などが使用されている。

現市街地の下には、いまだに多くの上水道施設が保存されており、「お城通り」の導水路枡など実際に見ることができるものもある。また、上水道顕彰のモニュメントが各所に設置されている。

上水道遺構

町家跡の発掘ではよく上水道遺構が見つかる。この写真は、かつて作られていた桶枡・竹管の上にさらに桶枡・竹管が改修敷設されていたものである。18 世紀。

⑯博文館跡

藩医、藩儒であった赤松滄州と、その子蘭室の尽力により、武士の子弟教育のため安永６（1777）年に完成した藩校である。落成に先立ち「博文館規範」が制定され、言行を慎み、諸書を博覧し、詩文に通じた人材の養成を目的とした。明治維新後は、明治５（1972）年の学制発布を経て、翌年に博文小学校として引き継がれたが、明治 10（1877）年には学校統合とともに中村へ移転した。現在は鶴の丸公園となっている。

博文館跡

⑰熊見川と中村

現在の加里屋川と中広川を挟む範囲には、かつて熊見川（大川）が流れており、永応寺側を中村といった。中村は、文安２（1445）年の『兵庫北関入舷納帳』にはすでに「中庄」として記載があり、延徳２（1490）年開創とされる永應寺とあわせ、古い歴史を持つ港町であった。浅野時代の城下町を北・東方向に出るには、まず東惣門を通らなければならず、そこから砂子、浜市方面と中村方面に街道が分かれた。尾崎村や坂越村に行くには中村橋で中村へ渡り、さらに惣門を通る必要があった。

明治 25（1892）年７月 23 日、千種川は大氾濫し、現赤穂市のほぼ全域の家屋に浸水、大破、倒壊、流失被害が出る史上最大の災害となった。その治水対策として、原因の一つであった尾崎川と加里屋川を分けていた亀ノ甲井堰を翌年に撤去し、尾崎川を本流とした。

旧熊見川護岸

⑱義士宅跡

忠臣蔵で有名な赤穂義士の屋敷跡地は、城内及び城下町内に散在しており、判明している場所には石柱及び説明看板が設置されている。

義士宅跡

⑲赤穂神社跡（天神宮・天満神社跡）

明和３（1767）年、森忠洪が赤穂城二之丸後郭に建立した森家三霊祠を前身とするもので、明治 10 年代に赤穂神社と改称した後、塩屋門西に遷された。明治 42（1909）年には加里屋町の天満神社（天神宮）跡地に改築移転、昭和 24 年には大石神社に合祀されたが、建物は改修されながらも赤穂カトリック教会として長く使用された。平成 25 年、幼稚園園舎建替えに伴い、解体された。

赤穂神社跡（撤去前）

⑳大島黄谷窯跡

大嶋九郎次は、嘉永元～２（1848 ～ 1849）年に赤穂に滞在した武蔵今戸焼の陶工、作根弁次郎に師事して亀甲焼を習い、黄谷と号して製陶を開始した。黄谷の製法は独自のもので、白、黒、緋色で表現された見事な濃淡による陶器は、その模様から雲火焼と呼ばれたほか、窯の場所から新土手焼、赤穂焼などとも称された。

㉑山崎山八十八箇所石仏

明治 33（1900）年に赤穂南部に点在していた石仏を、巡礼しやすいように山崎山に集積したものと言われる。山崎山麓には一番札所があったという。なお、赤穂城築城時に石垣裏栗石として用いられた流紋岩はこの山から多く採取され、山麓が石落とし場として使用されたという。

㉒赤穂町役場跡

明治 21（1888）年に公布された市制・町村制により赤穂町が生まれ、設置された。

㉓赤穂鉄道

明治 21（1888）年に山陽鉄道が設立され、神戸－馬関（現下関）間の建設が始まった。明治 23（1890）年には有年駅が開業したが、赤穂郡南部（現赤穂市街地）は取り残された。明治 43（1910）年の軽便鉄道法公布を契機として大正 4（1915）年に赤穂鉄道株式会社が設立され、大正 10（1921）年には播州赤穂－砂子－坂越－目坂－根木－周世－真殿－富原－有年にそれぞれ駅や停車場を備えた赤穂鉄道が完成した。起点となる播州赤穂駅は、現在の株式会社ウエスト神姫のバス営業所付近にあった。

昭和 26（1951）年に国鉄（現ＪＲ）赤穂線が開通すると、その使命を終え廃線となった。軌道の多くは、赤穂市に寄贈されて道路敷となった。

㉔赤穂市役所下遺跡

昭和 31（1956）年、市庁舎建設のための基礎工事中に、地下 1.5 mから 11 世紀の須恵器及び瓦器が数点が採集された。出土状況は不明である。

㉕赤穂市立歴史博物館

「塩と義士の館」を愛称とし、平成元（1989）年に赤穂城跡清水門東に建設された。館内展示は、赤穂の塩、赤穂の城と城下町、赤穂義士、旧赤穂上水道を主要テーマとし、国指定重要有形民俗文化財の製塩用具などを展示している。

㉖赤穂市立民俗資料館（旧専売公社赤穂市局庁舎）

明治 38（1905）年の塩専売法施行に伴い、明治 41 年に建設された専売公社庁舎。日本に唯一現存する塩務局庁舎であり、兵庫県指定有形文化財となっている。館内では市内で収集された民俗資料を展示している。

㉗区画整理事業・街路整備事業

城郭の防備のために設定された、城下町にみられる複雑に折れ曲がる街路は、近現代の市民にとって不便であった。そこで上仮屋の区画整理事業が立ち上がり、昭和 42（1967）年区画整理認可を受け、昭和 53（1978）年に事業完了した。加里屋は平成 10（1998）年度より街路整備に着手、平成 17（2006）年度に完了した。

大嶋黄谷窯跡

八十八箇所石仏からの眺め

赤穂鉄道播州赤穂駅跡

赤穂市立歴史博物館

赤穂市立民俗資料館

整備された「お城通り」